

私がハンセン病を患ったのは昭和二十一年（一九四六）秋、十歳の時でした。

発病するまでの鳥取県境港市での父母と私の三人暮らしは私にとって、今日まで生きてきた六十七年間の中で最も倅せな時のように思い出されます。

境港は私の生まれたところではありませんが、それまで父は仕事の関係で名古屋、三重、大阪と転勤を重ね、その都度、私たち一家は住所が変わりました。このような状態では雅男も学校を転々と変わり、友だちもできない、落ち着いて勉強もできない。友だちもできるようなにしてやらないと雅男が可哀相だ、今の状態では雅男のためによくはない、そう考えた父が定住を決めたところが境港でした。

毎日のように大山（伯耆富士）の雄姿が眺められる環境と、海の幸、山の幸にも恵まれて、私たちは、とても満ち足りた倅せな日々でありました。

しかし、その倅せもわずか三年ほどで崩壊してしまったのです。それは私の小学校四年生の時でした。母が夕食の仕度をしている側で私は燃え盛るかまどのまきに見入り、母は燃え立ったまきの炭状（けしずみ）を金属製の炭壺に入れていました。当たり前のことですが、炭壺は大変熱い状態になっています。しかし、私はその炭壺に片足の向こう脛が触れていることに気が付きませんでした。どれほどの時間が経ったのか分かりませんが、気が付いた時はズボンを通して向う脛一帯が濡れた状態になっていて、どうしたんだろう、どうして濡れたんだろう、不思議におもいながらズボンの裾をめくり上げて見ると、わが眼を疑うばかりの大火傷でした。信じ難い状況に、母は気を失わんばかりの様子で、仕事中の父に知らせたのです。

やがて父と母は何ごともなかったかのように平然としていている私に、「熱くなかったのか？分らなかった？」とうわづった声で言い、私を見つめながら理解に苦しんでいるようでした。

「知覚麻痺」それは熱い痛みが分からないハンセン病特有の症状で、大火傷が私を襲ったのです。

知覚麻痺は、患者によって麻痺程度も部位も範囲の大小もそれぞれ異なりますが、私の場合は向う脛一帯が麻痺していたのです。この出来事かららいを宣告されらい患者という烙印を押されました。

間もなく私は伯耆大山に見送られながら境港を離れ、人間として認めてもらえない、人間放棄の始まり、一般社会との別れとなりました。

そして五十七年の歳月が流れた今、静かに過去を振り返る時、しみじみと温かい父母の姿が思い浮かぶのです。治らない病気、伝染する恐れ病気、そして不浄で汚い患者として社会から排除され、徹底隔離のもとで非人道的な扱いをされながら、私は大人になりました。大人になるまでも、大人になってからも一貫して心にあった思いは、何時死んでもいい、むしろ早く死ぬことができれば……と望むようになりました。そんな自暴自棄の生き方をしている時、母から聞かされた話が私を救ってくれたのです。

私が入所して間もない頃、父母の面会がありました。その頃は太平洋戦争が終わり、戦争の後遺症ともいえる物資不足、とりわけ食料不足は死活問題で、私たちの愛生園でも昼食はじゃが芋一個、夕食はさつまいも一個といった代用食の日々でしたので、両親の面会で一番期待したのは食べ物でした。

父母と私の三人は少年寮近くの浜辺に出て、適当な岩場に腰を下ろし、母が中央に風呂敷包みを置いた時、何とも言えない懐かしい匂いがしました。

寿司です。母が重箱を開けると巻き寿司がいっぱい詰められていて、私はまさに餓鬼のように食べました。その様子を見ながら父が不思議に思ったのは、私が左手にさつまいもをしっかりと握っていたことだったそうです。

「雅男、そのさつまいもはどうしたんだ？」

すると私は「これはボクの晩ご飯だ」と答えたそうです。この時の会話の記憶は私には全くありませんでしたが、父が亡くなって十数年経った頃、母が教えてくれたのです。「雅男、私たちがお前のところに初めて面会に行った時、お前は夢中で巻き寿司を食べながら大事そうにさつまいもを持っていた。それを父さんが聞くと『これは

ボクの晩ご飯だ』とお前は言ったんや。あれから父さんは、『わしらの子があのようない用食を食べているのに、わしらも食事を変えんといかん』そう言っただけじゃが芋、さつま芋を長い間、飯の代わりに食べたんやで」

この話を聞いて、私は大きなショックを覚えました。

いたずらに年齢だけを重ねた希望のない人生、生きていくことの無意味さ、どうしてこんな人間に生まれてきたのか、親を怨み、世の中を怨み、世間に誰一人として私のことを人並みに見てくれる人はいない、そう思えてならない私には総べてが投げやりのような生き方しかできませんでした。

しかし、私のことをこんなに思い、愛して見守ってくれた父がいた、そして母がいる。それに気付いた時、じんと胸が熱くなると同時に今までの生きざまの何と愚かなことかと、反省すると共に父に頭を下げました。

嬉しい思いが満ち潮のように広がるなかで、これからは一生懸命に生きなければいけない、他人からどんな偏見、差別を受けようとも自分を見失わず、人間であることを忘れてはいけない、そう誓いました。

今はもう両親はいませんが、常に私を励ますように「一生を大切にしろ」と、優しく両親は語りかけてくれるのです。